

# 対話の方法論 ～対話を面白おかしく！～

澤田哲生

学術フォーラム「多価値化の世紀と原子力」

1

## 対話をおもしろおかしくするためには

### ・3つのヒント

- ① いわゆる“核のごみ”、問題をゼロベースで対話する。
- ② ゼロベースとは、予備知識の多い少ないのかべを取り除こうとする。予備知識なしでも良い。
- ③ 答えはない・・・答えを見つけようとしなない。

補足

- ・対話：“ソクラテスの産婆術”をやってみる
- ・共有(コミュニケーション)/対話(ダイアログ)/協働(エンゲイジメント)
- ・主権者教育になってればいいな
- ・参加型であり、常に学び続けようとするのが重要な

2

- 1. コミュニケーション
  - 科学的な見方と考え方 ・ 自省的、懐疑的
  - 社会に果たす責任とは何か
- 2. 対話：ダイアログ
  - 対話の相手を尊重する、年齢・地域・ジェンダーの壁を作らない
  - 相手の話をじっくり聞く
  - 相手のモヤモヤを聞いて、一緒に考え、モヤモヤを解消し表現する => **ソクラテスの産婆術**
- 3. 社会とのエンゲイジメント
  - 発信
  - 協働(collaboration)

3

## モヤモヤを育てよう！！

- モヤモヤ：知れば知るほど、考えれば考えるほどモヤモヤしてくる。モヤモヤと大事に付き合ってきたのが→矢座孟之進他「日本一大きいやかんの話」

<https://www.youtube.com/watch?v=hni9ZQryPjg>

### • ソクラテスの産婆術

ここでいう産婆術とは相手の話をじっくりと耳を傾けて聞き、自分の考えや思いと照らし合わせながら、相手のモヤモヤを表現する手助けをする。また同時に相手の話を批判的に見て自分の考えにうまく取り込んで自らの考えをアップデートしていく。

4

## 参考：矢座くんの思い（日本原子力学会誌巻頭言）

### ドキュメンタリーによる意識改革



東京学芸大学附属国際中等教育学校5年

矢座 孟之進（やざ・たけのしん）

高校1年生の4月からドキュメンタリー映画「日本一大きいやかんの話」の制作を始める。これまで「中学生サミット」や国内外の高校で上映を行ってきた他、高校生として初めて福島映像祭での上映を行う。東京都出身、アメリカ在住経験あり。

### 巻頭言

僕は高校1年生の4月からドキュメンタリー作品による原子力発電に対する意識改革というテーマで研究を行っている。研究目的は、若年層の原子力発電やエネルギー問題に対する関心や知識の向上を促し、これらの諸問題について話し合うベース作りをすることだ。研究を始めたきっかけは、中学3年生の時の社会科の授業で原発に関するディスカッションを行ったときに、議論が全く進まなかったことに違和感を感じたことだった。それ以来、賛成派と反対派の橋渡しを行うために原発に関するドキュメンタリー映画を制作する活動と、その上映を行って映像の効果の検証をする研究をしている。

これまで、東京電力などの企業、エネルギー政策研究所などのNPO、大学など公的機関の研究者、フランスの原子力参事官などの政府関係者などにインタビューしてきた他、福島の被災地や軽井沢新地層研究センターなどに足を運び取材を行ってきた。上映は福島県、東京都、岡山県、ミシガン州などの高校や、最終処分地問題をテーマとした中学生サミットなどで中学生を中心に上映を行ってきたが、最近では福島映像祭で上映を行うなど、より広い層の観客に対して上映を行っている。

これまで上映会では、上映の前後でアンケートを実施してきた。アンケートの分析をした結果、上映後に関心が向上したと答えた者の多くが、原発に対する意見に変化があったと回答していた。興味深いのは、これが東京の中学生であろうと、福島の高校生であろうと、中学生サミットであろうと、同様の結果が得られ

たということだ。関心が向上した理由の記述を見ると「知らないことを知ることができたから」「自分は今まで偏った視点で原子力発電を考えていたことに気づいたから」というように新しい知識や視点がついたからといった内容がほとんどだった。また、意見に変化があった理由の記述を見ると、単純に賛成から反対に、あるいは反対から賛成に変わったというわけではないことがわかる。「フランスの原発の利用の仕方を知ったから」「自然エネルギーについて詳しく知れたから」とあり、一方から他方に意見が変わったのではなく、自分とは違う意見を取り入れることができるようになったことで変わったと回答している生徒が多かった。

ここから予想されることは、50分のドキュメンタリーを見ることで多くの生徒の意見に変化があったということは、やはり少量の情報で安易に意見を決めてしまっていたのではないということだ。一方で、このドキュメンタリーによって多くの生徒が自分と違う立場の意見を取り入れ、この問題を多角的に捉えられるようになったのも事実である。このように様々な視点から原発を捉えられるようになることは賛成派と反対派の橋渡しへ繋がるものだと思う。

制作開始前の僕の原発に対する意見は賛成派に近いものだったが、調査を重ねて原発問題について知れば知るほど自分の中で迷いが生まれていった。今の僕の状況を表す言葉があるとすれば、葛藤に他ならないと思う。考えれば考えるほど、調べれば調べるほど、答えがわからなくなっていく。これだけ難しい問題なのだから、簡単に答えを出してはいけない。なるべく多くの同世代を巻き込んで、一緒に葛藤し、共に答えを見つけたい。アメリカ人がよく使う言葉で「Fight fire with fire」というものがある。若年層の原発に対する意識改革を行うためには、同じ若年層が行動を起こさないといけないと思う。だから僕はこのドキュメンタリーを作っている。

(2019年11月22日 記)

日本原子力学会誌, Vol.62, No.1 (2020)

(1)

5

## それぞれのやり方を創っていく

- 以上は私がこれまで原子力発電やいわゆる“核のゴミ”問題を中高生と一緒に考えてきた際の基本的な心構えや方法論です。
- 皆さんはどう考えますか？特にファシリテータの皆さんは、どうでしょうか？既存の何ものかにとらわれないことを・・・

6